

国立大学図書館協会地区協会助成事業（東京地区）研修企画 「協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを 目指して」を企画して

餌 取 直 子, 佐 藤 寿美子, 佐 藤 亮 太
澤 木 恵, 西 山 朋 代, 松 原 恵

抄録：2013年2月に国立大学図書館協会地区協会助成事業（東京地区）研修企画として「協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを目指して」を開催した。企画メンバーの結成から、企画の検討、当日の様子、参加者の感想や企画メンバーによる振り返りを時系列に沿ってまとめ、報告する。

キーワード：研修、協働、大学図書館

1. はじめに

1.1 本事業について

平成26年2月19日、お茶の水女子大学図書館キャリアカフェにて、国立大学図書館協会東京地区協会（以下、東京地区協会という。）主催の研修『協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを目指して』を開催した。本研修は、平成25年度国立大学図書館協会地区協会助成事業に、東京地区協会として応募し、事業費の助成を受けて、東京都に位置する大学のメンバー6名が企画・運営を行ったものである。

研修参加者数は国立大学を中心に募集した結果、国立大学以外、図書館職員以外の人も含め、最終的には26名となった。講師、話題提供者、ワークショップ監修・進行担当者、運営スタッフを含め総勢39名が研修に関わることとなった。

また、この研修を企画・運営・報告すること自体が東京地区協会の若手職員のOJTとして位置づけられており、本稿はこのOJTの総括の意味も含めて、研修の企画、立ち上げ、準備、運営当日の様子など報告するものである。なお、本稿で示す所属は平成26年3月現在のものである。

1.2 企画概要

研修テーマは「協働」とし、理論・事例・体験の3方向から「協働」についてアプローチすることとした。当日は大きく3部構成に分かれており、理論である講義、事例である話題提供、体験であるワールド・カフェ形式のワークショップを行った。

講義や事例報告など話を聞く時間ばかりにならないよう、参加者同士がなるべく多くの人と意見交換できるワールド・カフェの時間を多めに取り、プログラムの最後には、各参加者が研修に参加して学んだこと気づいたことなどを明日からの仕事や行動に

どう生かしていくかの決意表明として「宣言シート」に記入した。

以下に参加者募集時に配布した開催要項と当日のプログラム（表1）を挙げる。

[開催要項]

◆研修テーマ：「協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを目指して」

◆主催・企画：国立大学図書館協会東京地区協会企画・運営スタッフ

◆企画背景・主旨：学術情報の電子化やオープン化、教育・学習スタイルの変化、グローバル規模の競争の加速、大学への社会的要請の高まり等、大学を取り巻く状況は大きく変わりつつあります。このように複雑化・多様化する環境の中においては、図書館においても、チームで働くこと、また図書館以外の人びとと協働して取り組むことが今後より重要となってくるのではないのでしょうか。

いかにしてよりよく協働していくか、大学図書館職員ひとりひとりが考え、経験し、経験からの学びを共有し、また振り返り、そして次の行動につなげていくことが求められているといえます。

他の人びととの「協働」について改めて考える場を提供するため、以下のとおり研修を開催します。理論・事例・体験の3方向から「協働」にアプローチし、実践に活かせるようになることを目指します。

◆開催日時：平成26年2月19日（水）10：00～17：00

◆開催場所：お茶の水女子大学附属図書館 キャリアカフェ

◆参加対象：国立大学図書館協会東京地区会員館に所属する職員・国公私立大学等の教職員、学生

表1 プログラム

9:30-10:00	受付
10:00-10:15	開会
10:15-11:15	【理論編】レクチャー「コラボレーションを促す場のデザイン」 講師：安斎勇樹（東京大学）
11:15-11:55	【事例編】話題提供 ①阿見雄之（東京工業大学）：博物館との協働 ②谷奈穂（千葉大学）：教員との協働
11:55-12:50	休憩・昼食
12:50-13:30	【事例編】話題提供 ③伊達精也（東京海洋大学）：他部署職員との協働 ④十枝菜穂子，小野寺咲紀（お茶の水女子大学附属図書館 LiSA）：学生との協働
13:30-16:50	【体験編】ワールド・カフェ 監修・進行：安斎勇樹・和泉裕之（日本赤十字看護大学）
16:50-17:00	閉会

2. 企画立ち上げ

2.1 立候補と企画スタート

本企画では、国立大学図書館協会東京地区に所属する各機関から企画委員として若手職員の参加を募った。平成25年度は、東京大学、東京医科歯科大学、東京藝術大学、東京工業大学、東京海洋大学、お茶の水女子大学の6大学から各1名が企画委員として参加した。

参加メンバーが決まったところで、平成25年9月6日、世話役であるお茶の水女子大学図書・情報チームリーダーの森氏より全員にメールがあり、ここから本企画が始まった。

2.2 平成24年度からの引き継ぎ

キックオフミーティングに先立ち、メンバーの自己紹介と前年度からの引き継ぎをメールにて行った。前年度企画委員の世話役であった一橋大学学術情報課長の小陳氏、前年度の研修企画委員会メンバーとも情報交換を行い、前年度に作成された東京地区協会主催研修の広報用Facebookページを引き継ぐことを決定した。Facebookページは広報手段として有効活用できる媒体であり、前年度のアカウントを引き継ぐことにより、前年度に関心を持ち「いいね！」を押してフォロワーとなった人々に継続的に情報提供をしていけるというメリットが挙げられた。

同時に、委員会の名称（コクダイマルケン）やロゴも引き継ぎ、継続的に使用できるようにした。

2.3 キックオフミーティング

以下、時系列で検討のプロセスを紹介する。キックオフミーティングでは、事前にメールで役割分担を割り振り、各自事前準備を行ったうえで、ミーティングに臨んだ。キックオフミーティングは、今後、企画・運営を進めていくために必要と考えられる事柄を決定するために行った。すなわち、今後のスケジュール、役割分担、共同作業方法、そして研修のテーマや手法などである。

はじめに、改めてどのような事業としての研修企画であるかの確認と、スケジュール案の確認を行った（表2）。最終的には若干前後したのもあったが、概ねこのスケジュール通りに進行した。

表2 スケジュール案

平成25年 9月30日	・キックオフミーティング	
10月初旬		・テーマ決定 ・ワークショップの方向性 ・講師人選
10月下旬	・講師決定	
11月初旬	・講師依頼（打診）	・会場決定 ・ワークショップ内容決定 ・講師紹介作成
12月初旬		・広報 ・レジュメ作成
12月下旬	・国立大学図書館協会に申請	
平成26年 1月初旬	・講師正式依頼	
2月中旬	・当日	・当日準備
2月下旬		・報告書作成

役割は、チーフ、サブ・チーフ、広報、連絡、グループウェア、会計の6つに分け、割り振った。また、各ミーティングの準備および運営については、ミーティング会場の委員が担当することとなった。本企画メンバーは全員の所属する機関が異なるため、進捗状況および各種書類・資料を共有する場が必要と考えられた。そのため、共同作業方法を考える際に、オンラインで使用できること、という前提条件を設定した。連絡にはFacebookのグループ機能とメールリストを併用し、各種ファイルの共有にはDropboxを用いることとした。

また、受講者への広報としてはFacebookページを活用することとしていたが、申込等については別途問い合わせ用メールアドレスを用意し、連絡手段として用いることとした。

最後に、研修のテーマおよび手法について、検討を行った。

2.4 研修のテーマおよび手法の検討

検討手段としては、ブレインライティング¹⁾という手法を用いた。これは、「沈黙の中で行うブレインストーミング」として創案された手法で、指定の用紙に全員でアイデアを書き出していくものである。ほぼ初対面の企画メンバーが、互いに遠慮せずにアイデアを出し合うのには適していると思われたため、採用した。参加者は制限時間内に決められた個数のアイデアを書き、その紙を次の人へと回す。「6・3・5法」と呼ばれる6人で同時に3つずつのアイデアを5分間で考え、順次隣に回していく手法がその基本だが、キックオフミーティングの際には委員6名と世話役の森氏の計7名で行った。

すべての用紙が埋まったところで、今度は手元の紙に書かれたアイデアのうち、実現したいもの、興味のあるものに印をつけ、順次隣に回した。全員がすべてのアイデアを確認した後、アイデアを以下の8カテゴリに分類した。

協働／キャリア／コンテンツ／場・空間・デザイン／サービス／連携／教育・研究／その他

このうち、3人以上から印がつけられていたものについて、詳細な検討の材料とすることとした。このとき、各アイデアの数およびそれらにつけられた印の数をもっとも多かったカテゴリが「協働」であったため、平成25年度の研修の仮テーマを「協働」に設定した。

しかし、キックオフミーティングでは具体的な検討まで進めることができなかつたため、後日、第2回ミーティングにおいて続きの議論を行い、平成25年度の研修は「協働」という大きい枠をテーマとして開催することを決定した。講義については、コーチングやファシリテーションに関わる内容を希望する意見が多かつたため、それらを専門としている方に依頼することとした。また、第1回ミーティングのブレインライティングで出された開催形式や講師に関わる意見の中から、以下の5つを採用することとした。

- ・ワールド・カフェ方式
- ・決意表明コーナー
- ・勉強したくなる雰囲気を実践
- ・ロールモデルとなる先輩からの話
- ・できれば「先生」よりもっと図書館員に近い人に講師を依頼したい

さらに、決定したテーマおよび形式をもとに、研修当日のプログラムはおおむね以下の内容とすることとした。

1	イントロダクション（ファシリテーションに関する講演）
2	ワールド・カフェについての説明
3	自己紹介替わりのワールド・カフェ
4	ランチタイム
5	話題提供（数テーマ）
6	ワールド・カフェ（数セッション）
7	ラップアップ

3. 試行錯誤期～話題提供者、講師探し

研修テーマおよび当日の大まかなプログラムを決めたことにより、外部に依頼する必要があるのは、「ファシリテーションに関する講演」の講師と、話題提供者に決まった。

講師に関しては、ワークショップデザインやファシリテーションに関する研究や教育に関わっている若手の研究者に依頼する案が出され、最終的には平成24年度の東京地区研修のワークショップ講師をされた館野泰一氏（東京大学）のつながりで、東京大学大学院学際情報学府博士課程の安齋勇樹氏に依頼した。また、安齋氏の紹介で、ワールド・カフェ形式のワークショップに詳しい日本赤十字看護大学の和泉裕之氏が参加することになった。

話題提供者の選定にあたっては、まずメンバーがテーマである「協働」について、興味のある事例や話を聞きたい人を挙げていくことから始めた。挙げたものとしては、

- ・千葉大学や東京女子大学の図書館等の、活動実績がある図書館の事例
- ・建物の新築やリニューアルを行った図書館の活動
- ・大学内の教育推進室、教育センターとの協働
- ・図書館と学内の他施設（博物館等）との協働
- ・ラーニングコモンズにおける事例
- ・図書館から異動した人から見た図書館
- ・学生サポーターや学生ボランティア
- ・図書館間同士での協働事例
- ・他部署の職員で積極的に活動をしている人の話を聞いてみたい

などがあつた。これらのうちからメンバーがそれぞれ興味のあるテーマを選び、どうしたら具体化できるか調査を行い、話題提供者を選定していくことにした。ただし、興味のある事例は全国に散らばっているが、事業の予算上、話題提供者は関東地区内から選ぶこととした。

話し合いはミーティングに加え、Facebook上でも活発に行つた。先に挙げたテーマ以外にもいくつかの案が挙げられ、調査を行い、実現可能かどうか

検討を重ねた。検討の結果、この時点でのテーマは「教員と職員の協働」「他大学間の職員交流」「学内他施設との協働」「学生協働」となった。

この内「教員と職員の協働」「学内他施設との協働」については、テーマと話題提供者が同時に決まり、依頼を行った。また、「他大学間の職員交流」のテーマは「他部署職員との協働」に変更し、依頼を行った。「学生協働」については、多くの事例があったが、お茶の水女子大学の「LiSA」に依頼することになった。

これで話題提供のテーマと人が決定した。当初は様々な提案があったが、結果的には話題提供者は全員、メンバーの所属大学関係者になった。このことから、このような研修を企画するには、他大学や他図書館の動きに普段から広く目を配る必要はもちろん、身近なつながりを大切にすることの重要性を感じるようになった。

4. 企画の深化

当初より、企画メンバーの間では、この研修を講演会や事例報告会ではなく、ワークショップとして行おうと考えていた。しかし、いずれのメンバーもワークショップを企画運営した経験はなく、手探りであった。

「協働」事例の紹介を行ったり、安齋氏によるコラボレーションに関するレクチャーを設けたり、異なる価値観の人々との対話を行うワールド・カフェを行おうという各構成要素は早い段階で考えていた。ワールド・カフェとは、「メンバーの組み合わせを変えながら4～5人単位の小グループで話し合いを続けることにより、あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られる会話の手法」²⁾であり、様々な大学から参加者が集まるものの、全員でコミュニケーションをとる時間が限られている本研修においては適切であろうと考えられた。また、ワールド・カフェは「オープンな話し合いの場を創造し、協力の仕方を明確に示す」³⁾ことに効果的とされ、本研修の「協働」を組織で実践する際にも、ワールド・カフェ的対話の方法を知ることは有益なのではないかと考えられた。

なお、「協働とは何であるのかを考え、いかにしてよりよく協働を進められるかを学び合う」という学習目標は当初から考えていたが、ワークショップの活動目標を組み込んだ全体的なコンセプトに基づき意図的に構成を考えるという点においては、ワークショップデザインを依頼した安齋氏、和泉氏によるところが大きい。

4.1 講師との打ち合わせ（第1回）

12月、安齋氏、和泉氏との打ち合わせを、東京大学情報学環福武ホール「学環コモンズ」にて行った。

全体的な説明を終えるとすぐに、「問いは何なのか」と問われた。

ワークショップにおいては、「問い」が最大のポイントとなるという。その場で参加者が何を考えるのか。ワークショップの最後に、何が現れるのか。参加者が何を心得て帰るのか。それを明確にすることこそ、ワークショップの成否を分けるポイントだ。安齋氏、和泉氏との打ち合わせは、この「問い」を深め、共有する対話の機会となった。

当初、企画メンバーが考えていた「問い」は、「協働とは何なのか？ いかにしてよりよく協働を進められるのか？」というものであった。しかし、ともすれば「協働すべきだよな！」「協働事例すばらしい！」と無批判に肯定しがちな「協働」ということについて、一度疑ってかかる必要があるのではないかと。「協働」と一般的に言われていることがら、たとえば他部署との協働や教員との協働、学生協働などは、確かに「協働」のひとつの事例であるが、本当に「協働」とはそれだけなのか、実は日頃の仕事の中で、「協働」——異なる価値観をもつ人びとと、価値観や言語をすりあわせつつ共通の目標に向かって協力して働くこと——を無意識に行っているのではないかと。また、「協働」は目的ではなくビジョンを実現するための手段であろうと思われるが、ときにそれが、目的と捉えられてしまっていないか。

そのように考え、この研修では、安齋氏のレクチャーで協働する場のデザインについて学び、4つの話題提供によって多様な協働の事例を知った後で、我々はいかに協働するのか——それはとりもなおさず、我々はいかに働くか、ということでもあると思われるが——ということを多様な観点から考えてみる場を設けることとなった。

4.2 講師との打ち合わせ（第2回）

12月の打ち合わせ後、約1か月の間、Facebookグループで意見交換を行い、和泉氏から提示されたワークショップデザインの原案をもとに企画メンバーで検討しつつ、最終的な流れを決定した（表3）。

安齋氏、和泉氏との2回目の打ち合わせは、研修会場でもあるお茶の水女子大学附属図書館キャリアカフェにて1月に実施した。

研修全体の流れ、ワールド・カフェの流れなど、全体がよく統合されたものになるよう配慮する必要

があった。また、ワークショップは、参加者の属性をよく考えておくことが重要である。たとえば、「参加する大学図書館職員という人々はどういう人々なのか」「積極的にワークショップに参加してくれる人々だろうか」「その人々はこういう問いを投げかけたときにどういう話をしそっだろうか」などを考える必要があった。

企画メンバーの6人も、それぞれ別の大学に勤務し、勤務年数も1年から20年と幅広く、その経験や価値観は様々であった。したがって、「協働」に対する考え方も、ワークショップの流れに対する印象も異なっているのではないかと思われた。そこで、この打ち合わせでは、企画メンバーのそうした理解の違いを互いに認識し、必要な部分はすり合わせができるよう、実際にワールド・カフェを小規模に試行した。実際の研修をイメージするための重要なプロセスであったように思われる。

ワールド・カフェのデザインと並行して、安齋氏のレクチャーのテーマ、アイスブレイク的なワークなど、研修企画全体の構成を検討した。また、会場

では音楽を流すことや、「宣言シート」の共有方法、会場配置やグループ分け、会場配置や設備、小道具の確認など、細部まで検討した。研修をはじめて企画した者としては、これまで自分自身が受けてきた研修がいかにか念入りに準備されてきたものであったかということを実感することができた。

4.3 検討のプロセスを振り返って

安齋氏は、コンセプトの生成、プログラムの作成、メインから細部へと段階を踏んだワークショップ企画プロセスを説明している⁴⁾。それによれば、コンセプトは活動目標と学習目標から成る。活動目標は「非日常かつ内発的な楽しさを持つもの」、学習目標は「参加者にとって日常に意味をもたらすもの」であることが好ましく、また、学習目標と活動目標は互いに結びつき、パラレルに生み出されていくものであると述べている。

今回の研修企画においては「協働とは何であるのかを考え、いかにしてよりよく協働を進められるかを学び合う」というものであり、参加者にとって日常に意味をもたらすものであったといえる。一方、活動目標は、安齋氏という他分野の専門家によるレクチャーは非日常的なものであるといえるし、安齋氏、和泉氏により綿密にデザインされたワークショップは内発的な楽しさを持ちうるものであったと思われる。

また、プログラムの基本モデルは、安齋氏によれば⁵⁾、「導入→知る活動→創る活動→まとめ」という流れであるが、本研修にあてはめればおむね表4のようになるだろう。

実際の企画においては、必ずしもこのようなプロセスを厳密になぞることができたわけではなく、企画メンバーの手探りの状態からスタートし、途中、安齋氏と和泉氏という心強い協力者を得た後は多くを両氏に負うこととなった。企画メンバーの力不足

表3 ワールド・カフェの構成

内容	ねらい
趣旨説明とアイスブレイク	・自らのイメージの明確化講義での学びを言語化 ・イメージを他者と共有することで、同じ言葉に対するイメージの違いを体感 ・ワールド・カフェを行うための適切な空気感を醸成
ワールド・カフェのルール説明	・ワールド・カフェを行う上でのポイントとルールをレクチャー
ワールド・カフェ(1) 問い(1)「自分の体験した協働の事例(良い体験でも悪い体験でも可)」	・協働というテーマを自分ごとに落とし、実体験と結びつけて考える
ワールド・カフェ(2) 問い(2)「職場において、そもそも協働は必要か？」	・テーマに関しての深い探求心を駆り立てる
ワールド・カフェ(3) 問い(3)「これからの未来で、どんな働き方をしていきたいか？」	・ここまでの議論と「自分たちの生活・仕事・未来」がどう繋がっているのかを考えるキッカケをつくる
ペアトーク	・自らの学びや気付きを再度言語化しアウトプットする
宣言シート記入 問い(4)「明日から自分はどのようにありたいか？」	・自らの実生活と学びを結びつけ活かしていけるイメージをもつ
ルックアラウンド	全体シャッフルしながら共有

表4 プログラムの流れ

基本モデル	内容	本研修プログラム
導入	概要説明や文脈設定等	安齋氏によるレクチャー&ワーク
知る活動	講義や資料の調査などを通じた新しい情報の収集	安齋氏によるレクチャー&ワーク、話題提供
創る活動	集団または個人で新しいものを創り出す活動。ワークショップにおけるメイン活動	ワールド・カフェ
まとめ	創り出した成果物について発表・共有	宣言シートの記入と共有

はあれど、安齋氏、和泉氏と対話を深めながらプログラムを創り上げるプロセスは心躍るものであった。

5. 企画の実現

5.1 会場について

お茶の水女子大学附属図書館1階のキャリアカフェは、雲形の可動式テーブルと気軽に座れる椅子が配置された開かれた空間で、飲み物を飲みながら過ごすことができる会話可能なオープンスペースである。ワールド・カフェで参加者の会話を引き出すためには、伝統的な会議室や講義室ではなく、「お互いを尊重する気持ちを育むことができるもてなしの環境と心理的な安心感を確保」できる場所が求められることから⁶⁾、工夫次第で柔軟に対応できるこの場所を会場に選んだ。また、カフェ的要素と「もてなしの環境」を実現するため、ドリンクコーナーを設けた。

なお、キャリアカフェは、その奥に配置されているラーニング・commons（PCコーナー）への通路にもなっており、学生が会場のすぐ横を行き来する。参加者は、通りすがりの学生に見られる空間で研修を受けることとなり、「見られる」ことによる学習効果を体感できる場になったことも挙げておきたい。

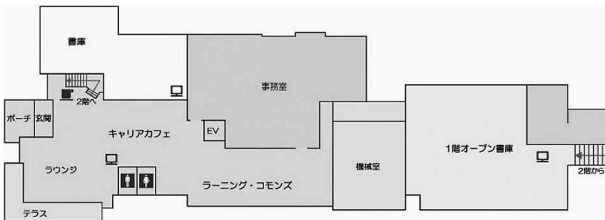


図1 お茶の水女子大学附属図書館1階平面図

5.2 話しやすい雰囲気作り

安心感を提供するために実施したことを2点挙げる。

まず、企画メンバーの服装について、堅い雰囲気を出すスーツスタイルではなく、黒を基調とした服にコクダイマルケンのシンボルマークをデザインした缶バッジ（写真1）を着け統一感を出した。このバッジは、講師や話題提供者にも身に付けてもらった。小さなことではあるが、これにより、初対面同士も多かった講師、ワークショップ監修者、話題提供者、企画メンバー間に連帯感が生まれ、参加者側にも和やかな空気が伝わり、安心感の提供に一役買ったのではないかと考えている。この「連帯感」という点では、当日のランチミーティングにおい

て、企画メンバーや講師らで同じテーブルを囲み、大皿のサンドイッチをつまみながら打ち合わせができたことも大きい。「同じ釜の飯を食った仲間」という気持ちが自然に湧き、午後からの研修はさらにスムーズに進行することができた。



写真1 缶バッジ

2点目の工夫は、名札である。白紙の名札用紙に、参加者自身が書くという方式をとった。記入するのは氏名のみで、大学名や肩書きは書かない。企画メンバーらの名札も同様にした。これにより、この場においては大学の規模の大小や経験年数を意識することなく、自由な雰囲気が発言する場であることが分かりやすくなっただけではなく、名前を書くという手を動かす作業により、参加者の緊張感が和らぐという利点もあった。

5.3 会場設営

スクリーンと講師用テーブルを前方に、参加者用テーブルを後方に配置し、参加者には、ワールド・カフェ1ラウンド目のグループごとに着席してもらった。グループ分けに当たり、所属機関、経験年数に偏りがないよう配慮し、各グループに4~5名を割り振った。

ワールド・カフェの際は、模造紙、8色入りの油性マジック、トーキングオブジェクトのクマのぬいぐるみを各テーブルに配布した。トーキングオブジェクトは、対話を促し、互いの話を尊重するための小道具である。それを持っている人が話し、持っていない人は話を聴く、というルールを作ることで、話者は安心して自分の話を進めることができる。このルールはあくまでも対話を促すことが目的であるため、テーブルでの会話が軌道に乗った場合、トーキングオブジェクトはその役割を終える。

ドリンクコーナーには、湯沸かしポット、スティックタイプのインスタントコーヒーやティー

バッグ、紙コップ等を用意した。

5.4 研修当日

当日は、参加者がリラックスして講義を受け、話題提供者の話に集中して耳を傾ける様子が見られた。午後からのワールド・カフェでは、ワークショップ監修者による進行のもと、活発な意見交換が行われた(写真2)。



写真2 ワールド・カフェの風景

以下に各プログラムを紹介する。なお、各プログラムの配布資料は、国立大学図書館協会のサイト内にある東京地区協会のページで公開している。

<理論編>東京大学大学院の安斎勇樹氏による「コラボレーションを促す場のデザイン」

「コラボレーションが生まれやすい場・生まれにくい場とは何だろうか」という疑問提起から始まり、学習環境デザイン論にもとづき、タスクのデザイン、メンバーの関係性のデザイン、スペースとモノのデザイン、そして創造的な風土のデザインについて講演いただいた。受講者が具体例を出しあいコメントしあうワークも行った。

<事例編>話題提供

東京工業大学博物館特任講師の阿見雄之氏、千葉大学附属図書館の谷菜穂氏、東京海洋大学企画評価課の伊達精也氏、お茶の水女子大学学生の十枝菜穂子氏、小野寺咲紀氏より、それぞれの立場から協働事例について報告いただいた。

<体験編>ワールド・カフェ

和泉氏、東京大学大学院の池田めぐみ氏の進行で、協働のイメージ、自分自身が経験した過去の協働事例、職場における協働の必要性、今後の職場での働き方などについて他の参加者と話し合うワールド・カフェを行った。終盤には、各人の明日からの具体的な行動を表明する「宣言シート」の記入と、参加者同士で宣言シートの内容を説明し合うワークを行

い、会場は大きな盛り上がりを見せた。

他の媒体に参加者の感想レポートが掲載されているので、そちらも参照されたい^{7) 8)}。

5.5 アンケートについて

本研修では、参加申込み時に事前アンケートを実施し、受講生の属性(所属機関、所属機関地域、図書館業務年数)と、自身の協働経験と職場における協働取り組みの有無を尋ねた。

当日の事後アンケートでは、この研修会を知ったきっかけ(広報)、参加理由、テーマ・各プログラムの満足度等のほか、研修の効果を計ることを目的として、「印象に残ったこと」、「得たこと・学んだこと」、「今後の仕事への期待」の3つの質問を設けた。アンケート結果の詳細は国立大学図書館協会東京地区協会に提出した事業報告書⁹⁾にまとめたが、以下に集計結果とその考察を簡単に報告する。

テーマと各プログラムの満足度は、「とても良かった」「良かった」の合計が100%となり、全体の満足度が非常に高かったことがうかがえた。(とても良かった(4)、良かった(3)、悪かった(2)、とても悪かった(1)の4点尺度で回答)

「印象に残ったこと」への回答(自由記述)には、テーマ、話題提供、ワークショップそれぞれから挙げられており、各プログラムに印象的な内容が含まれていたことが分かった。加えて、協働の理論やよりよい協働のコツが得られたという回答も複数寄せられていることから、本研修の目的である「理論・事例・体験」の3方向から「協働にアプローチし、実践に活かせるようになること」がある程度果たされたことが確認できた。

「得たこと・学んだこと」への回答(自由記述)には、「協働の広さに気づけたこと」「協働のあり方について理解が深まった」など、文中に「協働」という文字が含まれている回答が多かったが、中には、「物事の見方は人によって違うということ」、「他の人がどのような課題を抱えながら働いているか」、「他大学の人と話す楽しさ」など、ワークショップでの対話からの気づきを挙げる参加者も複数人いた。

また、事前アンケートで尋ねた「自身の協働経験」、「職場の協働実績」との比較からは、自身や職場での協働経験によって、今回の研修で得たこと・学んだことには違いがあり、それぞれの経験に応じた学びがあったことがうかがえた。例えば、自身は協働していないと認識している受講者の記述には、協働における信頼関係やコミュニケーションの大切さを学んだといった回答が見られたが、協働してい

ると認識している受講者にはこのような回答は見られなかった。その代わり、他機関の受講者と話し、他の事例を聞いたことが参考になったという回答が目立った。経験者にとっては協働において信頼関係が大事であることは自明の理であるため、研修で改めて学んだということはないが、それ以外の点で学びがあったのではないかと推測される。

「今後の仕事への展開」への回答（自由記述）には、「できる範囲での協働を実現したい」、「自分のことから一歩ずつ」など、少しずつできることから積み上げていきたいという趣旨の回答が多く見られた。また、「協働」に関して受講者それぞれが考え、何かを得たという回答が多く見られたことから、参加者ひとりひとりが、このワークショップを通じて普段からのコミュニケーションの大切さ、視野を広げることの重要性を感じたと考えられる。この研修が、自機関での協働をより良い方向で進めるための何らかの力になれたのではないかと考えている。

「その他、意見・要望・提言・今後受けてみたい研修等」（自由記述）にも多くのコメントが寄せられた。この企画を実施したことこそが企画メンバーの「協働」であり、「研修」であったことをメンバー自身が深く実感していたところではあったが、「職員が自分たちで自分たちのための企画を立てるというのはとても意義深いこと」のコメントから、そのことが受講者にも伝わったということが分かった。また、「マルケンスタッフともっとからみたかった」というコメントは、企画メンバーが企画運営に徹し、ワークショップなどで受講者と混じりあうことがなかったことについての指摘だと思われる。企画メンバーも今回の反省点として挙げている点であり、今後の同様の企画の際には留意してほしいポイントである。

5.6 振り返り（第8回ミーティング）

平成26年3月4日に最終ミーティングを行い、企画の振り返りと事後処理について話し合った。

振り返りでは、アンケート結果を眺めながら、当日の反省や感想を出し合った。良かった点として、用途が限定されないキャリアカフェの使い勝手の良さ、事後アンケートの満足度が高く、実際に参加者が楽しそうであったことなどが挙げられた。反省点としては、写真撮影などのために企画メンバーがワールド・カフェに参加できなかったこと、対話の時間だけではなく、個人が内省できる時間も設けられれば良かったことなどが挙げられた。このほか、自身がこの事業を通して学んだことをどのように今後

活かしていきたいかなどについて意見交換を行った。

6. おわりに

本事業の間、本来は別々の大学で業務を行うメンバーが集まり、ミーティングの合間や企画の内容について話し合っているとき、それぞれの抱える問題を相談しあうことが何度もあった。メンバーそれぞれの体験談からその問題の解決方法を考えたり、解決策が見いだせないもの、解決が難しい問題はその話題自体を研修内容に反映させたりしたものもあった。このような何気ないやりとりが、現在図書館の抱える現場の状況や問題意識に則した研修企画をすることができた一因であったと考える。

企画メンバー間のみならず、講師や話題提供者、ワークショップ監修者とも、情報交換・意見交換をしながら企画を進めた。本研修における講師、話題提供者の大半が、図書館関係以外の教職員および学生であった。ともすれば図書館内で業務が完結しているように思われがちな図書館職員が、普段の業務ではなかなか接することの少ないこうした人たちの考えに触れ、互いに議論することで、図書館内だけに留まらない多様な視点と、「協働とはなにか」について考えるうえでのベースを獲得できるのではないかと我々は考えた。そうした機会を本研修で受講者に提供したい、協働とは何か考え直すきっかけとしたい、という思いが企画意図のひとつとしてあった。

本事業は、「協働のススメ」という研修テーマを掲げていただけでなく、研修に向けた我々企画メンバー間の話し合いや、メンバーと講師らとの対話を通して研修企画をつくり上げていく、そのプロセスも、ひとつの協働のかたちを体現していたと感じる。そのなかで得られた気づきがあったからこそ、今回の研修企画を概ね成功へと導くことができたのではないかと。本研修の企画を通じて、協働とは大小の差こそあるが、決して特別な、非日常的な活動だけではないということ、また、協働のきっかけは日々の通常業務の中に潜在しているものであるということを見出し、研修の企画内容へと反映することができたと考えている。

今回の事業のように、各大学の若手職員を集めて研修を企画、実施するという手法は、実際の手順を学ぶことができるという意味でスキル・ノウハウの獲得ができるだけでなく、我々の興味関心から端を発した内容を研修のテーマに設定でき、それについて人一倍考え、深く追求することができるものもあり、ただ用意された研修へ参加しただけでは得る

このできないような貴重な経験を積むことができた。研修を終えて、本事業は研修参加者の成長はもとより、研修を企画、運営し、ひとつのプロジェクトをやり遂げることを体験できた企画メンバー自身の成長につながっているということを実感した。

対面での話し合いの回数は決して多くはなく、当日の運営に関しても反省すべき点は多々あった。しかし、我々が職場に戻り同じような業務に直面した際、本事業で得たこと、学んだことを活かして活動できるに違いない。一つのプロジェクトをやりとげた、ということが、今後業務を遂行するうえでの自信となっていけると感じる。

以上のように、研修の企画段階から様々なコラボレーション、協働が発生し、参加者のみならず企画メンバーにとっても非常に価値のある経験となった。本事業を通じて、企画メンバーを含め、研修参加者、講師、情報提供者など、本事業に関わった全員が、さまざまな気づきを得られたと感じている。また、本研修への参加者の多さから、他者との協働が重要視されていることを改めて実感できた。現在、図書館、大学、研究機関等、我々の取り巻く環境は大きな転換点を迎えてつつある。これからそれぞれの職場で、大小深浅さまざまな協働が行われていけよう。本研修に関わった全ての人にとって、本研修がその一助となれば幸いである。

謝辞

本事業に助成をしてくださった国立大学図書館協会地区協会東京地区協会、世話役を務めてくださったお茶の水女子大学図書・情報チームリーダーの森いづみ氏、研修当日のレクチャー講師・ワークショップ監修を務めてくださった東京大学大学院の安齋勇樹氏、ワークショップ監修・進行を務めてくださった日本赤十字看護大学の和泉裕之氏、ワークショップ進行を務めてくださった東京大学大学院の池田めぐみ氏に感謝申し上げます。また、話題提供をしてくださった皆さまに、感謝申し上げます。そして、本研修に参加してくださった26名の皆さま、企画メンバーを快く本事業に送り出してくださった職場の皆さまにもこの場を借りて御礼申し上げます。

注・参考文献

- 1) 星野匡. 発想法入門. 日本経済新聞社. 2000. p.165-170. (日経文庫). (ISBN 9784532110772)
- 2) 香取一昭, 大川恒. ワールド・カフェをやろう!. 日本経済新聞出版社. 2009. p.20. (ISBN 9784532314880)
- 3) 前掲書. p.29.
- 4) 安齋勇樹. “ワークショップを企画する”. ワークショップデザイン論: 創ることで学ぶ. 山内祐平, 森玲奈, 安齋勇樹著. 慶應義塾大学出版会, 2013. p.41-99. (ISBN 9784766420388)
- 5) 前掲書.
- 6) アニータ・ブラウン, デイビッド・アイザックス. ワールド・カフェ: カフェ的会話が未来を創る. 香取一昭, 川口大輔訳. ヒューマンバリュー, 2007. p.47. (ISBN 9784990329839)
- 7) 株原衣恵, 立原ゆり. 国立大学図書館協会東京地区協会 助成事業(東京地区) 研修企画「協働のススメ: つながる・つなげるライブラリアンを目指して」参加レポート. 大学の図書館. 2014, vol. 33, no.4, p.59-60.
- 8) 竹内茉莉子, 村上遥. 国立大学図書館協会東京地区職員企画研修 協働のススメ: つながる・つなげるライブラリアンを目指して. ラーコモラボ通信. 2014, 第28号, (オンライン), <http://archive.mag2.com/0001260410/20140316112517000.html>, (参照 2014-07-23).
- 9) 平成25年度国立大学図書館協会地区協会助成事業報告書(東京地区)(オンライン), http://www.janul.jp/j/operations/promotion/josei_25_4.pdf, (参照 2014-07-23).

< 2014.9.5 受理 えとり なおこ お茶の水女子大学図書・情報課, さとう すみこ 東京医科歯科大学図書館利用者サービス掛, さとう りょうた 東京工業大学附属図書館利用支援グループ, さわき めぐみ 東京海洋大学学術情報課学術情報第一係, にしやまともよ 東京藝術大学附属図書館資料サービス係, まつばら めぐみ 東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム >

**Naoko ETORI, Sumiko SATO, Ryota SATO, Megumi SAWAKI, Tomoyo NISHIYAMA,
Megumi MATSUBARA**

JANUL (Tokyo Regional Association) Training program “Cooperation : To be librarians who can connect and lead”

Abstract : In February 2013, the Tokyo Regional Association, which is part of Japan Association of National University Libraries, sponsored a professional development training program entitled “Cooperation: to be librarians who can connect and lead”. In this report, the authors provide a timeline on the formation of the organizing committee, planning discussions, the day of the workshop, and reminiscences of participants and organizers.

Keywords : training / cooperation / university libraries